

日付:2015年5月10日／聖書:使徒言行録17:28～34

主題:「我らは神の中に生き」

パウロによるギリシア・アテネ宣教である。アテネはギリシア文化の中心的な町で、哲学の発祥地ゆえ議論を交わすのが好きなようだ。また、ギリシア神話による神々の思想、文化がある。そういう厳しいところでの宣教だが、パウロもまた、知識が豊富で議論は望むところだろう。

そんなパウロに興味を持ったアテネの人々は、パウロをアレオパゴスと呼ばれる講演会場に連れて行き、そこで彼の話を聞くことになった。このアレオパゴスという会場は、かつて、ソクラテスやプラトンが大激論を交わしたことで有名である。パウロは、絶好の場所が与えられたとして、力を込めて語ったことであろう。22節からパウロの優れた演説が始まる。順調に演説が進み、彼らの心を捉えて行く。パウロは、ギリシアの詩人の言葉を用いて、神は唯一ただお一人であって、その神の中に、われらは生き、存在するものである(28節)と、多神教を信じるギリシア人に対して確信に触れて行く。それでも、まだ彼らの心を釘付けにしていたが、最終段階に入って、「死者の復活」ということを聞くと、ある者はあざ笑い、ある者は、「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言って立ち去った。

パウロは、大きな衝撃を受けたようである。この様子を、パウロ自身が、第Ⅰコリントの手紙の中で記している。「衰弱して、恐れに取りつかれ、ひどく不安」であったとある。ここに路傍伝道に失敗し、落ち込むパウロの姿が現されている。ただ、最後の34節に「しかし、彼について行って信仰に入った者も、何人かいた。その中にはアレオパゴスの議員ディオニシオ、またダマリスという婦人やその他の人々もいた」とあり、失敗したかと思う中でも、人の思いを越えて神が導いて下さっている事を、ここに見せられる。「我らは神の中に生き」思いがけない御業を魅せられる者であることを覚えたい。(神谷)